
GENTS THE WORLD

伝書鳩リネロサーズデイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GENTS THE WORLD

【Nコード】

N8642Y

【作者名】

伝書鳩リネロサースデイ

【あらすじ】

三年前、世界全体で発生した謎の地震により決して交わることのない別次元の世界、こちらの世界と全く同じ大陸の南極大陸をのぞく五大大陸が、この世界の海にパズルのように組み合わせり突如現れた。

今だ混乱する世界の中で、ひでつかいむ悲愴皆無…名前通りの人の域をはるかに超えた不幸な高校生

は毎日悲しい日常を送っていた。

そんなある日、悲愴のクラスに別次元から来た？という転校生、力

ンタレラ・リネシエロ 右目には眼帯そして背中には太刀を背負った不審者ならぬ殺し屋？と不幸にも友達になってしまう。そしてその日の帰り道、一人で歩いていた悲愴に驚きの言葉を告げられる。

「悲愴皆無、今日からお前は魔界帝国二代目の魔王だ！」

その日をさかいに悲愴の悲しすぎる日常は一変する…そう、まさか俺がこの世界の救世主になるなんてこの時の俺は想像もしていなかった。

ブログ はじまり（前書き）

初投稿させてもらう伝書鳩リネロサーズデイです。

この小説はスパロボのようにいろいろなアニメが参戦してくるんで興味のある方はぜひ読んでください。

プロローグ はじまり

「俺は夢の国の住人さ。」

中学生時代友人に言った半分本気のそのセリフで冷たい目で見られたその夜、俺は頭を抱えて後悔した思い出がある。

幼いころから両親に捨てられ、叔父と叔母に育ててもらった俺、悲^ひ愴^{そうかいむ}皆無は現在安いボロアパートで高校に通いながらバイトをする毎日で何とか生きながらえている。

これ以上叔父と叔母に迷惑をかけないようにと思っ^て始めた一人暮らし…それがありきたりな一人暮らしを始める理由、だが、俺み^たいに一人暮らしをしているという高校生は現在90万人を超えたというニュースを耳にしたことがある。

それはすべて3年前の世界全体で起きた地震…今では次元連結震と呼ばれているあの地震によるもの、2012年6月11日に起きた次元連結震により太平洋に北極と南極を除いたこの世界にある大陸と全く同じ形をした決して交わることのない別次元の大陸が膨大なエネルギーによりパズルのように組み合わせり突出現した…それが次元連結震である。

その次の日に世界が動き突如出現した大陸に調査団を派遣しようとしたとき、その大陸から巨大な熱源反応が感知されその熱源がまっすぐ調査団のいたアメリカの本部に高速で移動し何の抵抗もできなかった本部は数秒もせずに全滅した。

付近の監視カメラには空を駆ける20メートルはあるだろうと思われる巨大な白い人型ロボットが一機映っていて、あの大陸の文明の高さが明らかとなると同時にこの世界のものではない、別の世界から来たつまり…別次元の世界なのではないかという推測がわずか地震発生から二日後にでてきた。

その後も、たった一機のそのロボットにアメリカ以外の世界各国に被害をもたらしたそのロボットは日本で放送されたロボットアニメ

初期のガンダムにとても似ていたことから人々はそのロボットを白い悪魔：ガンダムと呼ばれるようになった。

このままではまずいと感じた世界政府は世界のすべての最先端の科学とたくさんの人間を使い、対ガンダム用ロボットAT直立一人乗アーマードルーパーり戦車のスコープドッグを開発した。

この名前は開発最大責任者の日本人が好きな装甲騎兵ボトムズからそのままとったものだといわれその形式や武器のすべてまでもがアニメのスコープドッグと全く同じで区別がつかないといわれるほどだった。

2012年8月12日：ガンダムが現れてちょうど2カ月が経過したその日、中国に向かうと思われる途中の通過地点日本の東京都5機のATが世界で初めて使用され、計算しつくした行動パターンそして5機の見事な連携攻撃によりガンダムの約四分の一の4メートルの大きさしかなかったものの見事に勝利した。

誰もが歓喜の声を上げる中で惨劇は起こった。

ボロボロになり穴だらけになったガンダムから突如激しい光が発生し日本全体を覆ったあとガンダムは完全に活動を停止する。

最後の無駄な足掻きだと思われた行動だったが、その光を浴びた18歳以上の大人たちが次々と苦しみだし死んでいき、その日の間に人口は激減さらにそのうちの18歳以上の大人はわずか3%残り97%がすべて18歳以下の子供となり、日本は絶望的な状況に陥った。

そして様々な国からの支援で18歳以上の大人が除所に増え始めているものの、人口は今だ1000万人を超えず、18歳以下の子供は90% 18歳以上の大人は10%と今だ絶望的な状況なのである。

だが悪いことばかりではなく、あのガンダムを倒したあの日から今だ出現した大陸の動きはなくなったが、今だ油断を一切許されない状況だがそれによりATの量産+開発が進み今ではどの国でも100機を超すATを所持していつガンダムが現れても問題はない

といわれている。

こうして今は再び人類は平和を取り戻した…だが、突如現れた大陸の詳細は分かっていない。

宇宙人が攻めてきた、神が天罰を下したなど、いろいろと説はあるが一番有効とされる説は突如発生した膨大なエネルギーにより、別次元の世界と一時的に連結し別次元の大陸がこの世界に吸い寄せられた…という考え方が代表的になり次元連結震という名前がついた。でもそれはあくまでも考えであり、本当のことは誰ももわかっておらず調査したくても、未知数の力を持つあの大陸に近づこうとするやつは誰一人としていないだろう。

誰も知らない真実…今思うと俺は…いや人類みんな文字通り夢の国の住民だったのかもしれない…そう思うとなぜか嬉しくてたまらない、それならこんな悲しい俺でもかっこいいヒーローになれるかも知れないからだ…

そして、悪夢は再び人類に降りかかる。そして俺の人生は全く別の未来に進みはじめてゆく…これは、名前通りの悲しすぎる高校生悲愴皆無の物語である。

ブログ はじまり（後書き）

説明長くてすいません…

よかったら感想をお願いします。

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（前書き）

ついに記念すべき一話となりました。

読んでも人はたぶんいないと思うが…とりあえず書くん で物好きな人は読んでくだ

さい。

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？

そこは、東京にある唯一の高校、ひょうこう白虹高校と呼ばれる高校…その高校でいつもの朝のホームルームが始まるうとしていたのだが、今日の朝はいつもと違っていた。

教師：「えつ」と、あいさつはいいのでそのまま聞いてくれ、今日のニュースみんな見たよな？」

男子生徒A：「アカギが驚巢編が終わっても続くってやつですか？」

教師：「うん、ちがうよ。」

男子生徒B：「じゃあ、あれですか？オリジンがアニメ化するってやつ。」

教師：「それも違うんですけど…」

男子生徒C：「分かった！！駒野がPK外したことで総理は怒ってるんですよ。」

教師：「そのニュースものすごく古いよね…せめて大津のダイビングヘッドを言っただけならいいんじゃない？ってちがう！！あれだよ！！あれ！！今朝全部のチャンネルで言ってたあの！！」

男子生徒A・B・C：「「「天気予報か！！」」」

教師：「ハモって言うな！！お前ら絶対わざとだろ！！だいたいお

前たちはいつもいつも…」

男子生徒A：「総理、ドラえもんみたいな怒り方はいいので早く話を戻してください。」

教師：「……昨日の夜、前よりかなり規模が小さい次元連結震が東京で発生したってニュースだったんだが…男子生徒A…お前放課後、職員室な。」

おっと、うつかりこの教師の説明をしていなかった…この教師の名前は小泉連太郎（こい

ずにれんたろう）ついたあだ名は総理でこの学校で三人しかいない教師の一人で、のりが

よく生徒にはそれなりの人気がある二年の担任である。

男子生徒A：「ええええええ！！ちよつまっ…それだけは勘弁してくださいよ総理！！」

小泉：「総理じゃなくて小泉先生だ。」

男子生徒C：「小泉総理、で、その次元なんたら震がどうかしたんですか？」

小泉：「おっと、そうだった話が違う方向に行く前に説明しないといかな…男子生徒C、職員室行き確定な。」

総理が生徒に向き直り、ゆっくり話し始めた。

小泉：「三年前からあの大陸に動きはないが、やつらは必ずまた、
なにかを仕掛けてくるはず…それは昨日起こった次元連結震もその
始まりの合図じゃないとも言いきれないのも確かなのが今の現状だ。
」

ざわざわと、クラスがざわめき近くの人とひそひそ話をしはじめる。

小泉：「はいはい、黙ってくださいね屑ども…」

一瞬で一切の話声がきこえなくなった。

小泉：「だが、この世界もなにもせず^{アーマドルバー}にそれを待っているわけでは
ない、今では対ガンダム兵器のA Tがどの国でも百体以上それを保
持しスコップドッグを初めとするドッグ系、トータス系、マーティ
アル制A Tなどの開発もされ対策は万全というのも今の現状なんだ
か、それは日本を除いた国だけ…なのも事実だ。」

クラスのみんながそれまでとは違う深刻そうな顔を浮かべ下を向い
ていた。

理由は明白、ガンダムから発生した謎の光によりここにいる大半の
生徒の親はみんな死ん

でしまい子供ばかりになってしまったこの日本にはA T乗りがほと
んどおらず130体A T

を保持している日本だが、そのうちの五体だけしか使われていない
…その五体も三年前東

京でガンダムを撃破した五体でそのうちの4人のA T乗りが光によ

って死亡、実際、日

本にいるAT乗りはたった一人しかないのだ。

小泉：「そこで、日本政府は対策として47の都道府県一つ一つに必ず一校はある高校の中

から抽選で選びその選ばれた高校の授業はすべてAT関連の授業となり、高校の全生徒を

AT乗りに育て上げるといふ制度がだされ、抽選によりひとつの高校の名前が読み上げられ

た…」

男子生徒D：「…!!…それってまさか!!」

今までの話を聞き話の趣旨を理解した何人かが総理を見つめ立ち上がる。

小泉：「察しが早くて助かる…そう、選ばれたのはこの東京にある唯一の高校…びやうこう白虹高校だ…」

男子生徒A：「…ふ…ふ…ふざけるなよ!!」

先ほどまでふざけていた男子生徒が声を荒げて立ち上がりその勢いで椅子が倒れた。

男子生徒A：「なんで俺たちがガンダムを倒すためにAT乗りにな

らなくちゃならないんだ!!」

女子生徒E：「そうよ!!自分たちの未来は自分で決める…なんで国に指図されなきゃいけないの!!」

男子生徒B：「もしかしたら死ぬかもしれない…俺はそんなことは死んでもごめんだね!!」

女子生徒B：「総理!!なにか言ってくださいよ!!」

男子生徒E：「そうだそうだ!!ちゃんと説明しろよ総理!!」

みんなの罵声が飛び交う…総理はただうつむくことしかできなかった…が…

????：「俺はやるぞ…」

その一言で教室は一瞬で沈黙しその声のあった方向を全員が見ていた。

????：「俺も運がいい、親が殺されても何もできなかった俺にあの大陸に復讐するチャンスがきたんだ…俺はやる!!誰がなにを言おうと俺はあの大陸にいる奴らを片っ端から殺してやるよ。」

その声はほんとにうれしそうで…そしてとても重い一言だった。

男子生徒A：「氷道…お前なに言って…」

男子生徒F：「俺もやる!!俺たちをもて遊んだあいつらに復讐するんだ…」

その話を聞いた生徒の一人が立ち上がる。

男子生徒G：「なら俺もやる。」

女子生徒F：「私もやるわ。」

一人また一人と次々と立ち上がり氷道という男子生徒に集まって行き、反対派の生徒と賛

成派の生徒が五分五分に分かれた。

男子生徒A：「お前ら分かつてるのか！！AT乗りに命の保証なんでもない…最悪死ぬかもしれないんだぞ！！」

対立する意見この状況があとどれくらい続くのか見えない未来はある人物によって終止符を打たれる。

???：「僕たちが何とかしなければ確実に世界は崩壊するのです…ふっふ…困ったものです。」

二年のクラスメイト全員：「ん？」

???：「その少女は、この世界を自分にとって面白くないものだと思い込んでいる…これはちょっとした恐怖ですよ。タンタンタンタンタンタンタン ドドドカッ
どこから…」

そこには机にうつ伏せになって寝ている男子生徒とその足元に落ちているまっがーれス、

ルが流れるiPodがあった。

小泉：「…またお前か！！悲愴皆無！！」

悲愴：「ギャアアアアアアアア…」

どなり声で飛び起き椅子ごと後ろに倒れ頭を強打する。

悲愴：「ウツギ！！あゝ遺体…驚かせないで下さいよ総理！！」

小泉：「学校に不要物を持つてくるなと何度も言ってるだろ！！…
ついでに遺体じゃなくて痛いだ…活字でしか分からないギャグをす
るな！！」

悲愴：「えっ、あっ！！…ごめんなさい…」

漢字の間違いに気付いた俺は素直に謝る。

悲愴：「で…なんの話をしてるんですかい？」

みんな：「……………」

悲愴：「あれ？なんかやつちまたパターンのような…」

氷道：「いつけゝみんな！！やつを完膚なきまでにボコボコにしろ
！！」

みんな：「了解！！」

[illegible]

クラスの全員とそして総理までもがどびかかりタコ殴りにされる悲愴皆無……こうして物語

は始まった。

こんな言葉を聞いたことがあるだろうが、悲しい奴ほど稼ぎが少ない……無論そんな言葉などない……俺が

即席で作った言葉である。

そう、それはそんな物語、何のとりえもない浅学非才……人並み外れた不幸な人間、主人公に全く向いて

いない悲愴皆無により生み出される全く新しい物語が…

第一話 悲しい奴ほどよく…って言葉…ないですか？（後書き）

書くのに多少時間はかかってしまいましたたがなんとか書き終えることができました

た。

感想よろしく！！

第二話 転校生はクールでかっこいい？（前書き）

ついに二話目となりアクセス数も前よりは少し多くなった今日この頃…

はあ…伝書鳩リネロサーズデイはこの頃絵が描けずため息をついたのであった。

わけのわからない前

書き 完

第二話 転校生はクールでかつこいい？

突然で申し訳ないが：君は不幸な人間と聞いたら誰を思い出すだろうか？いろいろと思ひ浮かぶだろが、一番代表的な人物といえどある魔術にでている上条当麻あたりだと思われが：この一帯に住む人間はみんなこの俺、悲愴皆無だと即答するくらい俺の悲しい人生が広まっている。

それは物心つかないころ両親に捨てられたときからはじまったその人生：それはあまりにも悲しいものだった。
代表的なのが、入学式集団感染事件である。

最初の不幸で、重い病気にかかり幼稚園に通えなかった俺は小学生になることはとても楽しみで、毎日わくわくしすぎて眠れないという状況が続いた。

そして待ちに待った入学式当日、不幸にも高熱が出てしまい入学式を休むと聞いた俺はおじいちゃんたちの反対を押し切って一人で入学式に参加した。

その後、急いで病院に連れて行かれ検査したところ、これまで見たこともない症例の超感染型新型のインフルエンザに罹っていることが発覚：そして翌日、入学式に参加したすべての人がそのインフルエンザに感染、全員が病院送りにされ二カ月以上入院し最高で一年以上も入院したやつもいたらしい：当然学校はしばらく閉鎖となり、学校に行けず悲しかった反面罪悪感を深く感じながら過ごした：これが入学式集団感染事件の全貌である。

そしてそれを境に俺の不幸は一気に加速した。

小学校は毎日歩いて登校するのだが、その時に必ず車か自転車にぶつけられ毎日のように救急車に運ばれるという日々が続く中学になるまで学校に行けた例^{ためし}がない。

俺にとって通うのは学校ではなく病院というシステムがいつの間にか出来上がってしまったのだ。

そして中学に上がり始めて学校に通う喜びに浸っていたのだが、入学式は前のこともあるので参加できず、クラスからは入院生活の恨みにより人間サンドバツクとなった俺は毎日半殺しにされながらもなんとか生きながらえていた。

さらに！！

氷道：「ながい！！」

その瞬間俺の横腹に氷道の両足が食い込みそのまま吹っ飛ぶ。

悲愴：「ぬがああああ！！…いった…なにすんだよ連麻！！」

なにもしてない俺にいきなりドロップキックをするやつを当然無視することなどできない。

氷道：「お前の紹介分が長すぎるから、ものすごく少ない読者のために強制終了させただけだ！！」

悲愴：「えっ？読者？なにそれ？もしかして食べれるの？」

なにを言ってるんだこいつは？

氷道：「…はあ、お前のバカさ加減は見てあきれるぜ…」

こいつは氷道連麻俺のたった一人の親友である。

悲愴：「なんだって、お前も成績はあまり良くないじゃないか！！」

氷道：「てめえ！！俺の紹介分がたった一行だと！！なんかもうちよつと説明することがあるんじゃないのか！！このクソ野郎！！」

さつきから意味分らないことを言って怒る氷道が次第にム力ついてくる。

悲愴：「さつきから意味分らないこと言っな！！この、暴力団組長の息子が！！」

氷道：「っ…貴様！！よりによって言ってはいけないことをいったな！！悪いがここで死んでもらおう！！」

悲愴：「なにを言ってるか分らんが…そっちがやる気なら返り討ちにしてやるぜ！！」

ドゴッ！！俺の顔に右ストレートが直撃する音。

ガッ！！ガッ！！俺が地面に二回バウンドする音。

ドーン！！壁に激突する音。

悲愴：「グッハ…っ…強い子に…会えて…」

朦朧もろうとうとする意識の中で俺はゆっくり目を閉じ…

バシャーン！！ バケツの水を氷道にぶちまけられる。

悲愴：「……」

氷道：「おっと、そろそろ一時間目が始まっちまう、確か場所は体育館だったよな…げっ！！やっぱ！！んじゃ俺はおいとまさせてもらっぜ！！」

走ってその場を去る友を俺は心の底から恨んでいた。

悲愴：「俺も行くか。確か場所は体育館とか言っていたよな…」

水をかけられたことで意識が完全に回復した俺はゆっくりと立ち上がり…

????：「ちよつといいか？」

突然聞き覚えのない声が聞こえるどうやら俺を呼んでいるようだ。

悲愴：「はい、なんで…ぎゃあああああああああああああ
あああああああああ！！」

振り向いた瞬間絶叫、急いで逃げようと即Uターンし逃げようとするが…

????：「おい、ちよつと待て！！」

だが、襟をつかまれ俺は声をかけられた人につかまってしまっしう。

悲愴：「すいません！！すいません！！すいません！！どうか命だけはお助けを…頼む！！この私、悲愴皆無を男にしてやってください！！」

観念した俺は必至に土下座&命乞いをする。

????：「いや…そんなに怖がらないでくれ…」

そうは言うものの怖がるなど言うほうが無理である。なぜかって？
だってかっこよくて右目には眼帯で背中に人間の背丈以上はある剣
？刀？ああ！！もうどうでもいい！！とりあえずものすごく怖い、
めっちゃクールなやつみたいな話し方はするので完全なクールキヤ
ラだし今にも殺すぞというオーラが背中からでてる感じがする。

悲愴：「すい…」

「すいません！！」と言おうとしたところでちよつと考える、相手は怖がるなと言っている…もしまた「すいません！！」とか言つて怖がるような素振り（そぶり）を見せたら…

俺の脳内未来予想図

????：「さつきから怖がるなと言つてるだろ！！死ねええええ！！」

背中に背負つた刀？剣？を抜き取り構え、俺にを確実に捉えてそれを振り下ろす。

悲愴：「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ザシュ！！俺が真つ二つに切られる音。

俺の脳内未来予想図 完

うわああ！！駄目だ！！確実に殺される！！こうなつたらなんとしても怖がつてない素振り（そぶり）を見せるしかない…

悲愴：「ああ…大丈夫ちよつと驚いただけだから…」

震える声を必至に抑え平常心を装う。

????：「…膝…」

悲愴：「えつ？」

????：「膝がめつちや震えてるが、大丈夫なのか…？」

悲愴：「まさか、そんなこと…ない…」

下を見ると尋常じゃないほど膝が…たぶん一秒間に十回は震えている。

…終わつた…悲しかった俺の人生を振り返りながら、だんだん恐れていた死が受け入れられる。

????：「あの…」

悲愴：「ああ、俺を殺すのか。さあ早く、殺してくれ。できればなんの痛みも感じない殺し方にしてほしいな。」

????：「いや、殺さないから…ちよつと聞いてくれ、お前みたい俺はたくさんの人に道を尋ねただが、お前と同じように叫んで逃

リネシエロ：「そうしてくれると助かる…そうだ！！俺と友達にならないか？そしたらお返しとかできるかもしれないしな…」

悲愴：「ああ、それくらいならお安い御用だよ」。

リネシエロが手を差し出し俺はその手を取り深い握手を交わす。

………心の中では叫んでいた、「やらかしたああああああああああああああああ」

悲愴：「で、道案内とか言ってたけど…どこに行きたいんだ？」

そんなことは表に出さず話題を変える。

リネシエロ：「おっとそうだった、二年の教室ってどこにあるの？
ん？二年の教室って俺たちの教室じゃないか。ここに何の用があるんだ…いやな予感がするのでとりあえず聞いてみることにする。

悲愴：「二年の教室か…そこでなにかすんの？」

あくまでも平常心である。

リネシエロ：「ああ、俺は転入生で今日からこの学校に通うことになったている。」

パタリ 俺がそのまま地面に崩れ落ちる音。

リネシエロ：「おい、どうした悲愴！！しっかりしろ！！」

意識を失う直前俺は思った、そういえば突然出てくる転校生は、クールでかつこよくとても不思議な人でその正体は超能力者かなんとかだということを…以前そんなことにあこがれていた俺を…心の底から呪っていた。

第二話 転校生はクールでかっこいい？（後書き）

こんな感じで前より長くなってしまいましたががんばって読んでみてください。な。

あつー！そうそう新しく書いたクソ小説ギャグガンダムってやつがあるんで、興味のある方は読んでみてください。な。

第三話 熱血キャラは子供向け（前書き）

ちつと遅くなりすぎましたがなんとかあがりました。

： まあ読んでるやつなんていないか…うれしいと悲しいの感情が混ざり合っでとつても複雑です。

第三話 熱血キャラは子供向け

あの転校生カンタレラ・リネシエロの紹介から始まった授業、紹介のときには刀的なものは背負っていなかったので誰も恐怖心は抱いてはいなかったかたもののこの俺悲愴皆無だけは頭を抱えて震えていたことをこのクラスで知る者はいないだろう。

んなわけで世界が注目している学校でのAT乗り育成授業が始まるうとしていた。

一時間目に行われた全校集会で最初反対していた生徒たちにより学校で一学年だけがその育成授業を受けることになったらしいが残念ながらじゃんけんで二年が負けてしまったらしい…らしいとしか言えないのは無論氣絶していたからである。

小泉：「えゝつと自己紹介が終わったんで早速授業に入りたいんだが…残念ながら俺にATを教えられるほどの知識は持っていない…
アーマードトルーパー
なので国からAT乗り育成授業を担当する講師が来ることになった。」

「
クラスのみんな：「おおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

小泉：「しかも、ガンダムを倒したあのAT隊の元一員だそうだ！

「
クラスのみんな：「おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお！！」

男子生徒A：「ってことは、あの超かつこいいって噂の日本唯一のAT乗り！！」

男子生徒D：「まじかよ！！テレビの取材を全部断っていて顔を知らない者はほとんどいないというあの人に会えるの！！」

女子生徒A：「ああ、色紙とサインペン用意しなくちゃ。」

女子生徒C：「私も私も！！」

男子生徒B：「俺はそのついでに握手してもらうぜ。」

あんなに命がどうたらこうたらとかで戦いたくないとかで争っていた人たちの変わりようがすごいような気がする…確かAT乗りの給料がひと月300万円って聞いたら飛びあがって喜んでたらしいからな…みんな生活に苦労してるんだな、うん。

小泉：「まあまあ、そう慌てるんじゃない…じゃあ講師入ってください。」

ワクワク　ワクワク

生徒の大半が机から身を乗り出していつでも突撃できる体制となる。ガラガラガラ！！

ドアが開いて…そして…

???：「やあみんな、待たせたな！！」

30代くらいのメガネをかけた天然パーマの男がドヤ顔で立っていた。

クラスのみんな：「……………ん？」

小泉：「ええ…改めて紹介しよう…にしおりたかうじ西織高氏この人はガンダムを倒したあのAT隊の幻の6人目と呼ばれている。役立たず…じゃなかった伝説のAT乗りだ…」

西織：「今役立たずって言おうとしたよね？違うよ！！ちゃんと出撃までしたんだよ…その後がれきで機体つまずが躓いて壊れちゃって…それで修理してたら…なんか残りの5機がガンダムを倒しちゃって…えゝその…なんだ…まあ、とりあえず俺は役立たずってことじゃない！！」

クラスのみんな：「……………」

…」

全員が机にきちんと座りなおして真つすぐ西木を見る。

小泉：「まあ、そういうことだ…講師なにか一言お願いします。」

西織：「うつしゃ！！この学年全員を1人前のAT乗りにするためにやってきた西木崇だ！！」

これから様々な厳しい訓練が君たちを待っているが！！君たちならきつと乗り越えられる！！もし泣きたいときがあつたらその時は俺

の胸で泣け！！以上！！」

小泉：「…うわあ、キモ…じゃなかったものすごく暑い一言ありがとうございます講師。」

西織：「暑い？熱いじゃないの？しかもキモって…」

小泉：「じゃあ西木講師に質問がある人、手を挙げて！！」

西織：「無視すんな！！」

氷道：「はい…」

総理と意味不明の西木講師のコントが行われている中で俺の親友ごと氷道連麻が手を挙げる。

小泉：「んじゃ氷道。」

氷道はゆつくり立ち上がる。

西織：「おお遠慮せずになんでも聞いてくれいいぜ。」

氷道：「こんな講師の言うことを聞きたくないんですけど、どうすればいいですか？」

西織：「このガキが！！言っていいことと悪いことがあるのを知って…」

小泉：「そうだぞ氷道！！今は質問タイムで相談タイムじゃない！！そういうことは次に行われる罵声タイムの時なら言ってもいいぞ！！」

西織：「フォローになってないよ！！なんだよ罵声タイムって！！いっ行われ…」

男子生徒A・B・C：「はい！！」

先生たちを3人の息ぴったりのボケでからかうことから黒い3連星と呼ばれ教師に恐れられている男子生徒A・B・Cがほぼ同時に手をあげる。

小泉：「おお黒い3連星！！こいつに一発なんか言ってやれ！！」

西織：「教育者の言うセリフじゃない！！」

ん、よく見ればあんなにいじられてるのになぜあの講師は笑顔なんだ…少し考えたがすぐ考えるのをやめた。

男子生徒A：「西織ではなくモジヤメガネ+ドM変態野郎講師…」と

呼んでもいいですか？」

西織：「そんなお ス にでてくるメガネと同じにしないでほしい
… 西木講師と呼んで…」

男子生徒 B：「じゃあ僕はクソメガネ＋超ド M 変態さんって呼びます。」

西織：「私はド M でも超ド M でもないから、素直に西木講師と呼ばば…」

男子生徒 C：「もうめんどいんでクズって呼びます。」

西織：「もういやだあああああああああああ！！」
泣きながら入ってきた扉を突き破り教室から全力で逃げようとする
が総理（小泉先生）が慌てて西：モジャメガネを取り押さえる。

小泉：「モジャ・クソメガネ＋超ド M 変態野郎そしてクズさん講師
まだ授業にも入っていないのにどこに行くんですか？」

西織：「いやだ！！もうこんなクラスに A T 乗りの授業なんてできないよー！！」

だだをこね必死になって小泉を振り払おうとするモジャメガネは…
これ以上は想像にお任せします。

小泉：「なにを言ってるんですか？みんな超エリートの A T 乗りの
モジャ・クソメガネ＋超ド M 変態野郎そしてクズさん講師をかつこ
いいと思ってるのに素直にそれが言えなくてついつい悪口を言っ
てしまっただけなんですよー！！」

西織：「ん？」

講師は急におとなしくなりゆっくりと振り向く。

西織：「… そうなのか？」

小泉：「そうですよ。本当はみんな超エリートのもジャ・クズメガ
ネ＋超ド M 変態野郎そしてクズさん講師のことが好きなんですよ。」

西織：「…………… それぐらい当然のことじゃないか！！」

急に元気になった講師は教台に立つ。

とりあえずこの講師は単純ですごくバカだということが判明し俺
は何となく教室を見渡してみる。

悲愴：「ん？」

俺の生まれつきの不幸により最悪の隣の席になってしまった転校生のカントレラ・リネシエロがとても真剣な表情であの講師を見ていた。

その目は呆れてものも言えないほかの生徒とは違う…まるで警戒しているかのような目をあの講師に向けているような…

そこで俺は考えるのをやめる、無駄になにかを考えるのは自分の悪い癖だということは身をもって知っているので視線をあの講師に戻す。

西織：「やつぱりもうやだああー!!」

小泉：「落ち着いてくださいモジャ・クズメガネ＋超ドM変態野郎そしてクズさん講師!!!」

西織：「もうその呼び方はやめてくれ!!」

この講師とはとても仲良くなれそうな感じが…ん？

誰かの視線を感じた俺は再び周りを見渡すがみんなあの講師を見て大笑いしている…

気のせいのようなので今度は窓から外の景色を眺めると澄みきった青空の下を車や人が行きかい運動場で陸上かなにかをやっているのか50メートル走をしている生徒がいる学校ならではのいつもの景色が広がっていた。

第三話 熱血キャラは子供向け（後書き）

やっべまた次の話考えなくては…なんか…

第四話 運命は必然…とか言っらしいよ？（前書き）

西織：俺の名前は結局西木なのかそれとも西織のどっちなんだ？

男子生徒A：いいえ、先生はクズです。

西織：殴ってもいい？

第四話 運命は必然…とか言っらしいよ？

そしてあの西織ならぬクズ講師は結局教室を飛び出してしまったために世界の注目するAT乗りの授業は次の日に持ちこされ人生初の二時間授業を体験した二年生一同はどこかに遊びに行っている中この俺悲愴皆無はというと…

悲愴：「はあ…いい湯だった…」

学生寮の中浴場を勝手に使い自分の家のボロアパートの帰り道を歩いていた。

悲愴：「うちのアパートには風呂がないからいつも帰りにここを勝手に使うんだが…」

帰りが早すぎて何もやることなく、金も余裕はないのでまっすぐ家に帰るつても結構悲しいもので…

ドカ！！

いつものお約束なのか車にひかれ俺は宙に舞いながら地面に落ちる。

悲愴：「うぐっ…」

いつもだがめちゃくちゃ痛い…体のところどころ痛いところはあるがいつものように腕の骨を一本持っていかれたいつもの感覚がする。悲愴：「そしていつものように車はどこかに逃げると…」

まったくもって運が悪すぎるがこんなことに慣れすぎた俺にとってこんなことどうということはない…ほらもう痛みが引いてきた。

車にひかれて倒れていた人間がパツと起き上がり帰り道を歩く。

???：「おいそこのお前！！」

悲愴：「ふへ？」

本日の二度目となる聞き覚えのない声に呼びとめられた俺はうしろを振り返ると、そこには…

悲愴：「秋葉原はここじゃないですよ？」

????：「初対面の人にたいしてそれはないぞ…」

猫耳＋尻尾のフル装備に髪の色が赤色のコスプレさん、俺と同じ年

くらいの少女を見ればそんなことを口走ってもおかしくはないと思う。

???：「そんなことはどうでもいい！！お前今車にひかれたようだが大丈夫なのか？」

悲愴：「へっ？…ん？…えっ！？」

???：「いや…当たり前前のことを聞いたはずなんだがなんでそんなに困惑すんの？」

急に申し訳ないが実は俺がいつも車にひかれてるということを知る人物は親友の氷道と小学生のころの俺を知る人しかない。

考えてみれば意外と簡単、車にひかれたら普通は周りの人がすぐに駆けつけ救急車と警察を呼ぶ光景が浮かぶだろう…そう、高校に入ってから俺が引かれるときはきまって周囲にひとがいない…なのでだれもそんな心配をして声をかけることをするようなやつはいないのである。

???：「あの…おい聞いている。よくわかんないけど泣き目になるのはやめて…」

悲愴：「えっ…ああごめんよ。大丈夫腕の骨が折れてるけどこんな寝たら治るし…こんなことは日常茶飯事だしね。」

しまった、うれしすぎて泣いてしまふところだった。

???：「ん？日常茶飯事？…ってことは毎日あんな風に車にひかれてるのか？」

悲愴：「まあね、他にも信号はきまって赤だったり、天気予報は悪いほうに外れちゃうし、

三日に一度は財布を落したりあとは…」

???：「いや、もうこれ以上言わなくて結構だ…その代わりに名前を覚えてくれないか？」

悲愴：「えっ！？いや…別に名乗るほどの者では…」

???：「いいから言え…」

悲愴：「悲愴皆無です…」

殺気をだしてまで聞くことじゃないと思う…

???：「うん」

猫耳少女は何かを考え始め時々唸り声をあげる。

それを眺める俺はふと思う…猫耳＋尻尾のフル装備ってこんなかわいいもんだったか? いや違うあの少女にあのフル装備がものすごく似合っているからああ見えるのか…今度氷道に猫少女計の画像売つてもらうか…

???：「よし！きめたぞー!!」

なにかを決心したらしい少女がこちらに歩み寄る。

悲愴：「あの、なんでしょう…」

「なんでしょうか？」と尋ねようと思ったその時…

???：「魔界帝国一代目魔王のアビス・F・ルシフェルが宣言する。悲愴皆無!! 今日からお前が魔界帝国二代目魔王だ!!」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

悲愴：「ここは三次元ですよ？」

アビス：「知ってるんだが…」

…が続く行が今日だけで二回でくるとは思わなかった。

悲愴：「いい精神科の医者を知ってるんで今すぐ紹介してあげますから…」

アビス：「いや…精神のほうは正常だが…」

悲愴：「大丈夫ですよ。値段はお手頃だし先生は優しいですから」

アビス：「人の話を聞けや!!」

悲愴：「ぎゃふん!!」

脱力系の叫びをあげてしまう。

アビス：「私を二次元と三次元の区別もつかない廃人と同じにする

な私は本当に魔界帝国一代目の魔王で魔界を支配していたんだぞ！

悲愴：「そんなことを急に言われても信じられるわけがないじゃないか！！」

もつともな話である。

アビス：「ああ、もういい！！もう決まったから早速…」

となにか言いかけたところで…

ズドーン！！パラパラパラ…

空から人が降ってきた衝撃で着地点のコンクリートの道路がへこんで穴があいた。

？？？：「あ痛たた…ちょっと勢いつけすぎたかな…」

そう言い足をさするまでもや俺より年下と思われる少女がいた。

悲愴：「ここってホントに三次元なのか？」

自分の世界がよくわからなくなってしまう。

アビス：「さあ？私に聞かれてもな…？」

隣のアビスと名乗った自称魔王までもが曖昧な返事をする。

アビス：「今失礼なこと考えなかった？」

悲愴：「とと…とんでもない！！」

なぜ分かった！！

？？？：「ん？…あつ！！」

その少女が俺を見て突然声を上げる…俺の顔になにかついているのか？いやそれとも見ていられないほど自分が不細工なのか？…でも、顔だけは並より上くらいって言われるし…

？？？：「悲愴皆無…」

悲愴：「へっ？」

な…なぜ俺の名…あ、俺の名前はここ辺じゃ有名だったのをすっかり忘れていた。

？？？：「悲愴皆無さん…ですか？」

ちくしょー！！有名なのは名前だけかよ！！…だが、返事をしないわけにはいかない…

悲愴：「園十里弟素（その通りです）。」

アビス：「活字でしか分からんギャグをするな…」

魔王にツツコミをされてしまった。

???：「やっぱり…写真と全く同じ顔をしているし…これで間違いはなさそう…」

なにか言ったらしいが全く聞き取れなかった。

悲愴：「あの…なん…」

???：「兄さん!!」

そしていきなり俺の胸に飛びついてきた

???：「」

その少女はどうやらうれしそうだが…全く状況が飲み込めない…ていうか今日はちよつとそんなことが多くないか？別次元からきたというカンタレラ・リネシエロ…魔王らしいアビス・F・ルシフェルというコスプレ少女に二代目の魔王に任命されたいし…そして最後には俺を兄さんと呼ぶ…ん？ってことは俺に妹がいた！？ああ…考えるだけで頭が痛くなる…が!!

悲愴：「今の状況は最高だな…」

心の底からそう思ってしまった…

ジャン！

鉄でできたなにかがなにかにこすれあう音…そう、まるで刀をさやから抜き取る感じの音で…

???：「!!伏せて!!」

シユン…という風を裂く音がし俺の頭があつた地点に刀が横に薙ぎ払うような形で振られていて少女に引つ張られなければ俺は確実に死んでいたという状況にいつの間にかたたされていた。

???：「ちっ!!」

フードで顔を覆っているために顔はよく分からないがおそらく男だと思われるそいつは再び刀を構え俺に振り下ろそうとする。

悲愴：「いやあああああ!!死ぬ死ぬ死ぬ!!殺される!!」

なんとか男から見てひだりの方向に転がりなんとかそれをかわすが

完全に体制が崩れその場にうつ伏せになってしまっ。

???：「これで!!」

その隙を逃すはずもなく、その男は刀を再び俺に振り下ろす。

悲愴：「ちくしょお!!俺の不幸はここまで悪化するなんてえええ!!」

死を覚悟した俺は強く目を閉じる、これから必ずくる激痛に備えるために…が、

ガキン

振り下ろされる刀をなにかが受け止めたいい音がして俺は反射的に目をあける。

するとそこには周りがオレンジの光を放つサーベルを持った少女が男の刀を受け止めている姿があった。

???：「よく分かりませんが兄を殺そうとするのならこの私、地球防衛企業遊撃課一番隊の悲愴^{ひそうかなで}奏がとめてみせます。」

周りがオレンジ色の光を放つサーベルを受け止めている刀が徐々に赤くなり溶けて刀が曲がりそれを少女が切り裂き武器を無効化する。それを察知していた男は刀を即座に捨てて後ろに下がり間合いを取る。

???：「くっ…邪魔がはいるのは厄介だな…」

そう言くと男は地面に何かを投げ付ける、するとそこからたちまち煙が起こり周りが見えなくなる。

奏：「逃がすもんですか!!」

逃がすまいと追撃をはかろうとする。

アビス：「待て!!」

それを見たアビスが奏の手をとる。

奏：「離してください、でないとあなたを…」

アビス：「無闇に突っ込むのはリスクが高すぎる、深追いはしないほうがいい。」

奏：「うっ…」

アビスの言ってることが正しいと判断した奏はそれ以上男を追うこ

とはない、白い煙でふさがっていた視回がもどるがやはり男の姿は見たらなかった。

アビス：「あの男…けっこうやる奴かもしれない…」

奏：「あの戦いを見てなにひとつ取り乱していないあなたのほうがかなりできるほうだと思いますが？」

アビス：「当たり前だろ、なんせ私は魔界帝国一代目の魔王アビス・F・ルシフェルだからな。」

仁王立ち+ドヤ顔で自慢する。

奏：「えっ、魔王!？」

やはりそれを聞いて驚かない人間はいないらしい。

悲愴：「た…助かった…」

パタム

奏：「まあ、こんな風に襲われたら普通こうなりますからね…」

アビス：「全く、二代目の道はまだまだ遠いな。」

現在時刻は11時30分、まだ一日の半分もすぎてないのに衝撃の連続である…

はあゝ運命は必然…とかいう言葉を今だけ信じてやろう。

第四話 運命は必然…とか言っらしいよ？（後書き）

SDガンダム ガシャポンウォーズが熱い！！
古くてすんません…

第五話 チョコボールで「本当にあるのか?」と思っくらい当たらない金のエ

アスハム・ブルダーって誰だっけ?

第五話 チョコボールで「本当にあるのか?」と思うくらい当たらない金のエン

悲愴：「…ん？」

景色がぼやけて見える、どうやら俺は寝ていたようだ…なんか嫌な意味で気絶した思い出があるが…まさか!!

悲愴：「夢!! 今までの全部夢だったのか!!」

奏：「あつ、起きたんですね兄さん。」

アビス：「全くあのくらいで気絶するとはな…目も向けられないぞ。」

悲愴：「……………」

どうやら夢ではなかったようだ…

アビス：「おゝい…あからさまにがっかりするのはやめてくれ。」

???：「チョコ!! モドチョコモッド!!」

ん? なにか聞き覚えのない声が…見てみると…

悲愴：「ぎゃああああああああああああお化けお化けお化け!!」

アビス：「うるせえ!!」

ちやぶ台を叩いて怒鳴るコスプレ少女。

悲愴：「がはっつ!!」

おかしな叫び声をあげ即正座する俺。

奏：「兄さん…意味不明な叫び声になってますよ…」

それは俺の心の中で言ってるから言わなくていいんだよ、自称俺の妹よ…

アビス：「こいつは魔王に忠実に従う悪魔のチョコボールモドキ…略してチョコモドだ。」

チョコモド：「チョコッコ!!」

ちやぶ台の上におかしな生き物が立っていた。口で説明するのがめんどくさいので料理本風に説明しよう。みんな、紙とペンを持つんだ。

1、 まず、逆J的なものを書いて…

やっぱこれもめんどいので俺が今描いてあげよう。

うん、これは…

アビス：「うわ…下手だな。」

悲愴：「仕方ないじゃん。パソコンで二十五秒くらいで描いたやつなんだから」

奏：「兄さんリアルな話はやめてください…」

本当のことを書くのはそこまでしておこう。

アビス：「このチヨコモドはお前をこのアパートまで運んでくれたんだぞ！！礼の一つくらいはないのか！！」

悲愴：「感謝します。監督…」

チヨコモド：「チヨコチヨコ」

アビス：「お前たちはいつたいどこの高校の野球チームだよ？」

悲愴：「違っぞ自称魔王少女、高校の野球チームじゃなくて柏レイソルなんだぞ！！」

チヨコモド：「チヨコチヨコ」

アビス：「次自称とか言った日には貴様の命はないぞ？」

悲愴：「あつ、意外と疑問形だ。」

奏：「どんな意味があつて言っているかが分からないのですが…」

悲愴：「ふん、まだまだ修行がたらない自称俺の妹。」

奏：「スクラップになりたいんですか？」

悲愴：「ごめんなさい…」

俺の土下座により俺は二人と一匹に敗北してしまった…というかそのうちの二匹って最初俺の味方だったような気がするようなしない

ような…まあいいか。

悲愴：「それでじしょ…」

ギロ！！×2

悲愴：「…じゃなくて魔王様、今は何時でございますか」

ふう…危うくたった五話で小説が最終回を迎えそうになった毘ぜいアビス&奏：「五時三十二分…」

バシューン 俺はうまく逃げだした。

アビス：「逃げるな悲愴！！これから二人の紹介の詳細に入るところなんだぞ！！」

奏：「そうですよ兄さん！！泊ってください」

悲愴：「泊ってくださいじゃなくて止まってくださいなんですけど！！」

追いかける二人を無視して全力で走る。どうやら俺はまたもや不幸な目にあっているらしい、しかもこんなに大きな不幸が続いたのは初めてである。もしかするとこのまま俺は死んでしまうのかもしれない。仕方がない前々から考えていたあの作戦を実行する日がやってきたようだ。

そして十分後

悲愴：「ふいゝあの二人やつとあきらめたのか。」

毎日生徒に追われてきた俺をそう易々（やすやす）とつかまるられるわけがないのである。

悲愴：「んじゃ早速行ってみ…」

チヨコモド：「チヨッコ！！」

悲愴：「んじゃめな！！」

あのじしょ…じゃなくて魔王様がつれてきたという変な生物チヨッコボールモドキ略してチヨコモドが俺の肩に飛び移ってきたのだ。

悲愴：「驚いたな…まさか俺の速さについてこれるなんて…すごいなお前。」

チヨコモド：「チヨッコッコ」

チヨコモドは自分の胸を強くたたいた、おそらくえっへんと言っているのだろう。

悲愴：「んまあ、細かいことは気にしないでとりあえずついてくるのなら覚悟するんだな…俺が行くところは少々厄介だぞ。」

移動中

悲愴：「はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…ぜい…ぜい…ぜい…」

1000段以上もあつたのではないかと思われる階段を上り俺はそ

の場に崩れ落ちていた。

チヨコモド：「チヨッコ、チヨッコ！」

悲愴：「くっ…俺の肩にはあ…ずっと乗ってはあ…るんだからあ…
…苦労するのはあ…は俺だけだった…」

少し考えれば分かることだっただけに妙に悔しい、人間生きていれ
ば一度は体験することだと私は思う…

悲愴：「まあ…」

そう言うことやつの思いで起き上がる目の前には大きな鳥居そして
さらに奥に大きな建物がそびえ立っていた…そこは…

チヨコモド：「チヨコチ」

悲愴：「すまん…なんて言ってるか全然分らん。」

…神社である。

第五話 チョコボールで「本当にあるのか?」と思っくらい当たらない金のエ

ん?あれ挿絵ってどうやって貼り付けるんだ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642y/>

GENTS THE WORLD

2011年12月21日19時48分発行